明　柔

2015

創部 110 周年記念号

明治大学体育会柔道部

明治大学校歌

（一）白雲なびく駿河台　眉秀でたる若人が
撞くや時代の暁の鐘　文化の潮みちびきて
遂げし維新の栄になふ　明治その名ぞ吾等が母校
明治その名ぞ吾等が母校

（二）権利自由の揺籃の　歴史は古く今もなほ
強き光に輝けり　独立自治の旗翻し
高き理想の道を行く　我等が健児の意気をば知るや
我等が健児の意気をば知るや

（三）霊峰不二を仰ぎつゝ　刻苦研鑽他念なき
我等に燃ゆる希望あり　いでや東亜の一角に
時代の夢を破るべく　正義の鐘を打ちて鳴らさむ
正義の鐘を打ちて鳴らさむ

【目　次】

【挨拶】

明治大学長　福宮　賢一 …… 1

講道館長　上村　春樹 …… 2

柔道部長　森下　　正 …… 3

明柔会会長　関　勝治 …… 4

【明大柔道部１００年の軌跡】
（創部～１００年間ダイジェスト） …… 5

【最近１０年間の歩み】
（２００６年～２０１５年） …… 9

【歴代の団体優勝写真】 …… 14

【明大柔道の歴代チャンピオンたち】…… 16
（全日本柔道選手権・オリンピック・世界柔道選手権）

【頑張れ明柔魂！！】

宮澤正幸（元日刊スポーツ記者）…… 18

木村秀和（スポーツライター） …… 19

【部員紹介】 …… 20

【想えば―― 及び 編集後記】 …… 21

挨　拶

明治大学柔道部 創部 110 周年によせて

明治大学長
体育会会長　**福宮　賢一**

このたび、明治大学体育会柔道部が創部 110 周年を迎えられましたこと、誠に慶賀の至りに存じます。本学を代表いたしまして、心よりお祝いを申し上げます。

1905 年（明治 38 年）に誕生した柔道部。同年は 5 つの運動部が設立され、本学体育会の活動がスタートした年であります。換言すれば、柔道部の有する長い歴史と伝統は、ひとつの運動部が歩んできた軌跡だけに留まりません。現在 45 団体が所属する体育会を揺籃期から支えるとともに、常に先頭に立ち牽引してきていただきました。本学体育会の中でも極めて大きな存在であります。第二次世界大戦前後の社会情勢の中では、活動を休止せざるを得ない時期もありました。しかしながら、その不遇の時代を乗り越え、そして明治大学の高い社会的評価の素地といえる揺るぎない基盤の構築に多大なる貢献をされております。あらためまして、110 年に及ぶ功績に対し、感謝の意を表します。

また、柔道部は、今日に至るまで、全日本学生柔道優勝大会における 16 回の優勝をはじめ、2 度の全日本学生柔道体重別団体優勝大会制覇、さらには、全日本柔道選手権大会優勝者、世界選手権・オリンピック金メダリストを多数輩出されております。その積み重ねてこられた戦績は、本学のみならず、日本の柔道界の中でも燦然と輝くものであると同時に、母校・明治－ MEIJI －の名を世界に轟かせています。このことは、本学にとって大変名誉なことであり、その礎には、「柔道は人間形成の一大修行なり。礼節を正し、質実剛健を旨とする」という柔道部のスピリットが、創部以来、今もなお脈々と受け継がれていることによるものであると拝察いたします。また、それは柔道の世界に留まることなく、様々なフィールドで多くの卒業生が活躍されていることからも窺えます。柔道を通じて涵養されてこられた人間力の根幹は、1 世紀を経てもなお変わらぬこの精神にあり、これこそ明治大学柔道部にとって唯一無二の宝であり、皆さんの逆境を跳ね除ける「一本」であると確信しております。

さて、今や日本の競技人口を上回る国もある程に発展を遂げた柔道。それは，ひとつのスポーツ競技が世界に広まったということだけではなく、日本の伝統文化と日本人の精神性を世界の人々が触れるきっかけになったとも言えます。その普及の一翼を担ってこられたのは、明柔会の皆さまと伺っております。スポーツを通じた国際交流活動は、平和で豊かな社会を実現していくうえで欠くことのできないものであります。明柔会各位の取り組みに敬意を表するとともに、皆さまの活動を見習いながら、本学も世界平和に貢献でき、次代を切り拓くことができる学生の育成に努めてまいります。

柔道－ JUDO －は、正式種目となった 1964 年の東京オリンピックから半世紀を経て、2020 年にその誕生の地である東京に再び戻ってきます。50 年を越える歩みは、国際的スポーツとしての変容を求められてきた歳月でもあるかと存じます。2020 年を前に、今一度、変わることの大切さと変わらないことの大切さに思いを馳せ、JUDO でありながらも、これからもその本質を見失うことのない「柔道」であって欲しいと思っております。そして、東京オリンピックでは、日本「柔道」の精神と未来開拓力を発揮した本学関係者が、光り輝く「個」として飛躍されることを期待しております。

結びにあたりまして、日頃から柔道部を支え、精力的に部員の育成にあたられております関係各位に心から感謝を捧げます。また、明治大学体育会柔道部のさらなる飛躍と明柔会のますますのご発展を祈念するとともに、近い将来、大学日本一を奪還され、白雲なびくこの駿河台の地に新たな伝統の 1 ページを刻まれることを願いつつ、私の挨拶とさせていただきます。

明治大学柔道部創部 110 周年を祝して

講道館長　**上村　春樹**

明治大学柔道部が創部 110 周年を迎えられたこと、心からお慶び申し上げます。

明治大学柔道部が創部された明治 38 年当時は、嘉納治五郎師範が講道館を創設されて 20 年余りが経過し、各方面に柔道が急速に普及して講道館柔道が興隆期を迎えた時代でした。大学柔道もこの頃から東京在の学校を中心に柔道部が結成されるようになり、明治大学柔道部は常にその中心的な存在でありました。

特に、嘉納師範の薫陶を深く受けた三船久蔵十段を師範として迎えられて以降は、大正 13 年に開催された第一回明治神宮体育大会柔道大会における優勝を皮切りに昭和初期には当時は稀であった地方遠征やアメリカ遠征を挙行するなど学生柔道界の雄としてその名を轟かせ、戦後 GHQ により学校柔道が禁止された際にはその復活に大きな役割を果たすとともに、学生優勝大会の再開後には姿師範、葉山監督の下で破竹の三連覇を成し遂げるなど日本柔道の復興に大きく貢献されました。

その後、昭和、平成と日本柔道を取巻く環境が厳しさを増す中にあっても、学生柔道界における活躍はもとより、日本を代表して世界に講道館柔道を知らしめる名選手を数多く輩出するだけでなく、曽根康治先生や神永昭夫先生をはじめとする明治大学出身の先輩方が柔道界発展の一翼を担われ、日本柔道界を牽引されてきたたことは広く知られるところであります。

講道館と明治大学柔道部の関わりには歴史的にも深いものがありますが、嘉納行光名誉館長は創部 100 周年に寄せた祝辞の中で、「明大道場と講道館は地理的な近さもあり、長年、学生、OB たちが講道館大道場に足を運び、爽快な稽古を続けてこられた。これも明大柔道部が柔道界の中軸として重責を担ってきた由縁」と申しております。

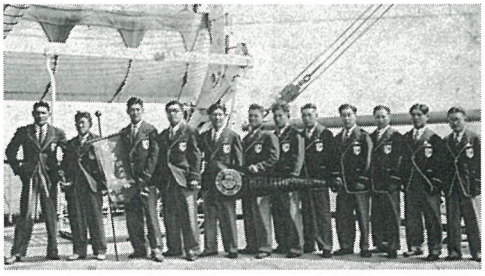
そうした 100 年の歩みに更に 10 年の歴史が積み重ねられる中にあっても創成期の輝きを失うことなく、ここ 10 年の間に棟田、上川、海老沼の 3 君が世界王者となっており、来る東京オリンピックにおいても明治大学柔道部出身選手の活躍が大いに期待されているところであります。

さて、わたくしが明治大学柔道部を巣立って早 40 年余が経過しました。後輩達の試合ぶりを見守る一人の OB としての胸中はお察し頂くしかありませんが、置かれた立場を全うして広い視野で物事に対処する姿勢も多くの先輩方の謦咳に接して学んだつもりです。

将来を見据えた稽古に工夫を凝らしながら日々地道に努力を積み重ねて行くとともに、講道館柔道精神に裏打ちされた明治大学柔道部スピリットを大いに発揮して、後輩達が柔道界のみならず社会にとって有為な人材として育まれることを切に願ってお祝いの言葉とさせて頂きます。

部　歌

きいてみたかよ　明大の柔道部
よいよい　あらよい　こらよい
よいやのよいよい
轟く　選手のその名を
知るや　よいよい
あらよい　こらよい
よいやの　よいよい



1936(昭和 11)年　第２回アメリカ遠征（横浜港・龍田丸）

2015 年　創部 110 年目の新入生

明大柔道部 110 周年を記念して

明治大学 柔道部 部長
政治経済学部 教授　**森下　正**

御陰さまで明治大学柔道部は、2015 年に 110 周年を迎えることができました。長年にわたる明治大学の学長をはじめとする、多くの関係者の皆様のご支援とご指導に対して、深く御礼申し上げます。また、現役の学生に対するご指導のみならず、影になり日向になり、日頃、学生を支え続けて下さる明柔会の皆様に、改めて感謝申し上げます。

さて、明大柔道部は創部以来、数々の栄光に輝くすばらしい成果をあげて参りました。多くの世界チャンピオンのみならず、オリンピック代表も多数、輩出して参りました。また、卒業後、柔道界のみならず、産業界や行政など、国内外の多種多様な分野で活躍する多くの卒業生が広く社会に貢献してきたことも、周知の事実であります。

柔道のすばらしさは、試合に勝利し、優勝することだけに限られたことでは無く、柔道の根幹にある武士道精神に基づく教えの具現化にあります。私は 2011 年 11 月から柔道部長に就任し、以来、丸 4 年が経ちますが、武士道精神の本質を完全にマスターした訳ではありません。しかし、明大柔道部が次ぎの 120 周年、130 周年をへて未来へと飛躍を遂げていくためには、明大柔道部の門を叩き、入部してくる学生諸君には、この武士道をしっかり具現化できる人材に育って欲しいと考えております。

つまり、心（精神）と技（知識）と体（健康）の 3 つをバランス良く訓練し、グローバル化した厳しい競争社会で生き抜く力を学生に身につけてもらいたいのであります。というのも、学力偏重教育は、今や受験産業と共に過熱化し、かつ少子化の影響もあって、今や多くの学生が浪人せず、現役合格で大学に進学してくる時代になりました。結果的に多くの学生が勉学の「知識」の訓練しか受けていないのです。このことは、スポーツ偏重で育ってくる柔道部の学生にも、当てはまる事実があります。多くの柔道部の学生が「技」の訓練に偏った経験しかないのです。

こうした結果、如何なる課題が発生するのかといえば、厳しい状況に直面すると心が折れたり、腐ったりしてしまう。あるいは強いプレッシャー下に置かれると体調を崩してしまう。心と技と体の 3 つをバランスがとれていないからです。

心（精神）の強化は、メンタル･トレーニングという新しい指導方法が既に確立されてきております。オリンピックで多数のメダルを獲得する国では、メンタル・トレーニングを専門とする多数のメンタリストが選手団に同行しているそうです。しかし、日本は心（精神）の強化が非常に遅れており、メンタリストでは無く、メンタル・ヘルスの専門家が数名、同行するだけと伺っております。

また、体（健康）の強化は、体力強化の練習だけでは実現できません。怪我をし難く、病気にかかり難い食事、規則正しい生活習慣といった当たり前のことを日々、実践することが求められます。しかし、このことが非常に難しい時代にあることも事実です。体に良くない甘味料や添加物の入った出来合の食べ物は、我々の周りにあふれています。ネット社会の普及は、夜更かし人間を増やしています。

こうした課題がある中でも、「心技体」のバランスのとれた人材を育成し、輩出することが、明大柔道部に今こそ、求められているといえます。現役の柔道部の学生諸君にとっては、文武両道はもちろんのこと、メンタルを鍛え、健康な体を作りあげるための精進を、自発的、かつ自主的に取り組むと同時に、多くの方々のご支援とご指導の御陰で今があることに感謝する気持ちを胸に刻んで稽古に励むことが、明大柔道部の長い歴史に対する恩返しになるはずです。その結果、5 年後の 2020 年に開催される東京オリンピクの代表に現役学生と卒業生の多くが選出されるはずです。

未来に向かって明大柔道部は、必ず飛躍します。今後も変わらぬご支援、ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

天気晴朗ナレドモ

― 創部110周年を迎えて ―

明柔会会長　**関　勝治**

明治38年、西暦1905年に明大柔道部が創部され、本年110周年を迎えた。

ご同慶の至りであり、明大柔道部そして明柔会を支えて下さった多くの方々に改めて深く感謝申し上げる次第である。

さて、明大柔道部には“部歌”や“優勝の歌”が歌い継がれている他には、明文化された訓示めいたものは存在しない。

110年の長きに亘って、稽古と試合に臨む姿勢、そして柔道着を身に着けていないときの立ち振る舞いをもって、先輩から後輩へ独自の伝統が連綿と継承されて来た。

明治、大正、昭和、平成と時代が変遷し、社会背景や価値観も大きく変貌して行く中において、常に変わらず継承されたものは、「稽古を通じた人間修養」「優勝を目指す気概と実践」「学生とOBの結束力」であったと考える。

創部から100年までの詳細な歩みについては創部100周年記念誌に譲るが、ここ10年を振り返ってもこうした明柔の力の源泉は失われていないと信じる。

無論、苦難もあり喜びもありの10年であった。

棟田、上川、海老沼という3人の新たな世界選手権者を駿河台道場から輩出したこと。学生団体優勝大会においては体重別団体における一回だけの優勝に留まっていること。藤原監督が志半ばで急逝してしまったこと。明大柔道部内外で柔道の本質以外のことが虚実含めて取り沙汰されるに至ったこと。

大いに自戒、反省すべき事柄も多いが、何れの出来事も明柔会全体が強く結束した結果、大学内外の多くの方々の理解や支えを得て乗り切り、最も苦労の多い現場指導は飯田部長・藤原監督体制を経て、森下部長の下で園田監督代行から猿渡監督へと引継がれ、ここに創部110年を迎えることが出来た。

110年前の遠い日に当時の学生自らが明大柔道部を創部して以来、その後輩達が今日も駿河台の道場で柔道修行に汗を流せることを大いに喜び誇りに思う。また同時に、これからの10年、そして遠い将来においても“強い明柔”を堅持するために明柔会が取組むべき課題と責任の大きさに思いを馳せ、次世代に渡すバトンの重さを痛感する。

ところで、改めて我が国の年表を紐解いてみると、明大柔道部が創部した明治38年は日本海対馬沖において日本海軍がバルチック艦隊に完勝して世界を驚愕せしめた年でもある。

「天気晴朗ナレドモ波高シ」。

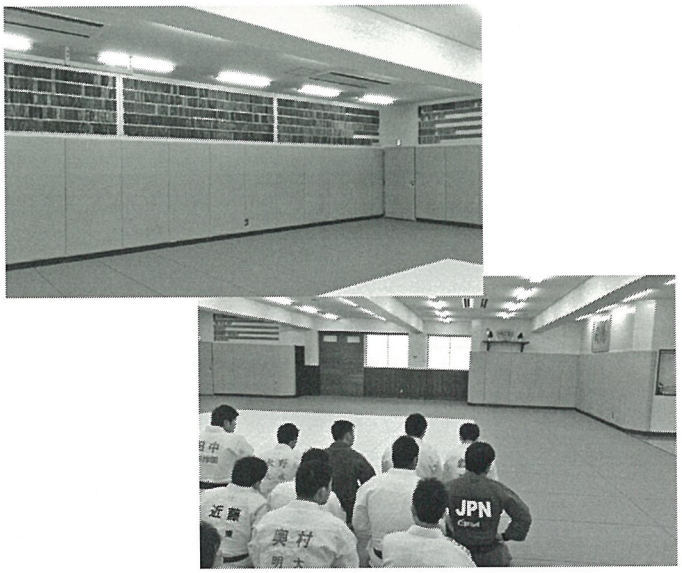
勝利を納めるためには常に組織の練度を高めるとともに、一朶の矜持を胸に、己の置かれた環境を冷徹に分析して事に臨むのが肝要である。

優勝の歌

獲るなら　獲ってみろ　優勝旗
　　わたしゃせぬ
桜の木陰で　鍛えたる
こちゃ明大の柔道部にゃ　骨がある
　　こちゃえ　こちゃえ

やるなら　やってみよ　優勝旗
　　わたしゃせぬ
涙をながして　鍛えたる
こちゃ　明大の柔道部にゃ　骨がある
　　こちゃえ　こちゃえ

現在の道場風景（2003年～）



明大柔道部１００年の軌跡（創部～１００年間ダイジェスト）

西暦	年号	主な出来事
１９０５年	明治３８年	・創部（部長 松村 定次郎法学部教授、師範 内田 作造五段、部員 26 名） 『柔道は人間形成の一大修行なり。礼節を正し、質実剛健を旨とする』 この一条をスピリットとして４月に明治大学柔道部が創設された。
１９０９年	明治４２年	・講道館が「財団法人」として名実ともに日本柔道の指導的立場を確立。
１９１１年	明治４４年	・初代師範 内田 作造五段に代わって 福田 常雄三段が師範に就任。
１９１２年	明治４５年	・福田師範が有段者部員を引率して信越地方に遠征し試合を行う。 （これは後に各大学でも恒例となっている地方遠征の所謂ハシリである）
１９１３年	大正　２年	・２代目師範 福田 常雄に代わって　講道館の俊才 三船 久蔵五段が師範に就任。 （在任期間　大正２年から昭和 32 年） ・第２回の地方遠征を関西・信越で行なう。
１９２３年	大正１２年	・関東大震災で道場を焼失。 ・東京学生柔道連合会（東京学柔連）発足。【加盟校 13 校】
１９２４年	大正１３年	・第１回明治神宮体育大会柔道大会（明治神宮大会）開催。 明治大学は決勝で早稲田大学を１－０で下し、輝く第１回大会の優勝校となる。
１９２５年	大正１４年	・第２回明治神宮体育大会柔道大会から一部（大学）、二部（大学予科、高専）に分けられ開催。（昭和 14 年まで）
１９２７年	昭和　２年	・第４回明治神宮体育大会柔道大会において二部で優勝。 ・東京学連対全満州選抜戦が毎年交互に開催される。（昭和 14 年まで）
１９２９年	昭和　４年	・「明治大学柔道部の賛助と会員相互の親睦を図る」事を目的に、全国ＯＢ組織「明柔会」を結成。
１９３０年	昭和　５年	・明治大学創立 50 周年。 ・大学記念館の地下に道場が新設される。 ・第７回明治神宮体育大会柔道大会において二部で優勝。 ・第１回全日本選士権大会開催。（現在の全日本柔道選手権大会）
１９３１年	昭和　６年	・８月に明柔会の協力を経てアメリカ遠征を敢行。
１９３３年	昭和　８年	・第１回学生個人選手権大会（段別）が開催。
１９３４年	昭和　９年	・第 11 回明治神宮体育大会柔道大会において二部で優勝。 ・第２回学生個人選手権大会四段の部で保永永四郎が優勝。
１９３５年	昭和１０年	・第 12 回明治神宮体育大会柔道大会において一部で優勝。 ・第５回全日本選士権大会一般壮年の部で葉山三郎（学生）が準優勝。
１９３６年	昭和１１年	・７月に第２回アメリカ遠征を敢行。（2 頁に写真掲載） ・第４回学生個人選手権大会二段の部で眞尾信明が優勝。
１９３７年	昭和１２年	・第５回学生個人選手権大会四段の部で佐藤春生が、三段の部で阿部庄兵衛が優勝。 ・第７回全日本選士権大会専門壮年の部で浜野正平が準優勝。
１９３８年	昭和１３年	・第６回学生個人選手権大会二段の部で笹川一郎が優勝。 ・第８回全日本選士権大会一般壮年の部で姿 節雄（学生）が３位。
１９３９年	昭和１４年	・第７回学生個人選手権大会二段の部で久米　勝が優勝。
１９４０年	昭和１５年	・戦争の為　各大会が中止。 ・第１回全日本学生柔道選手権大会が開催されるも第２回大会は戦乱のため中止。
１９４１年	昭和１６年	・太平洋戦争が開戦。（12 月８日）
１９４５年	昭和２０年	・太平洋戦争は日本の敗戦で終結。（８月 15 日）
１９４８年	昭和２３年	・10 月に「明大柔道クラブ」発足 （大学本館中庭に参集。メンバーは明柔会７名、学生 13 名） ・監督 古賀愛人
１９５０年	昭和２５年	・秋、念願の学校柔道禁止令がＧＨＱの通達で解除。 （昭和 20 年敗戦後、学校柔道の活動は禁止されており、ＧＨＱ（占領軍総司令部）による厳しい監視の下、被災をまぬがれた地下道場も閉鎖されていた。） ・全日本学生柔道連盟発足。（学柔連）

西暦	年号	主な出来事
１９５１年	昭和２６年	・『明治大学体育会柔道部』が復活。 部長 出口林次郎教授、監督 葉山三郎、師範 姿節雄、部員は金子泰興主将以下 42 名。 ・姿　節雄先生が師範に就任。（在任期間　昭和 26 年から平成 11 年） ・戦後最初の学生大会である第３回全日本学生柔道選手権大会（大阪野球場・野外の試合場）、決勝戦は同門対決の末、金子泰興主将が優勝、２位に大野忠博。 ・目黒区下目黒に柔道部合宿所が開設。約 20 名の部員が大学の寮である白雲寮から移る。（戦前に立てられた木造２階建ての一般家屋、以後平成９年に現在の合宿所に改築されるまで 45 年間使用）
１９５２年	昭和２７年	・目黒合宿所だけでは足りず社会福祉法人「澄水園」鵜目栄八理事長の支援の下、昭和 47 年までの 20 年間食住の心配なく部員生活を送れるように計ってくれた。 ・第１回全日本学生柔道優勝大会が開催され、明治大学が圧倒的な強さで初優勝。 ・第４回全日本学生柔道選手権大会において曽根康治主将が優勝。
１９５３年	昭和２８年	・第２回全日本学生柔道優勝大会が開催され、明治大学が連覇。 ・第５回全日本学生柔道選手権大会は明治同士の決勝戦となり、末木茂が渡辺政雄に勝ち優勝。
１９５４年	昭和２９年	・第３回全日本学生柔道優勝大会が開催され、明治大学が３連覇。 ・第６回全日本学生柔道選手権大会は、石橋毅次郎が優勝し明大勢４連覇。
１９５５年	昭和３０年	・第４回全日本学生柔道優勝大会は準決勝で日大に破れ３位、連覇を逃す。
１９５６年	昭和３１年	・小川町校舎５階に道場が新設され移転。
１９５７年	昭和３２年	・第６回全日本学生柔道優勝大会で４回目の優勝。
１９５８年	昭和３３年	・全日本柔道選手権大会において曽根康治が優勝。 ・第７回全日本学生柔道優勝大会で連覇、５回目の優勝。 ・第 10 回全日本学生柔道選手権大会において神永昭夫と古賀（天理大）の決勝戦は延長８回合計 38 分間の戦いも両者譲らず異例の優勝預かりとなる。 ・第２回世界柔道選手権大会は同門対決のすえ曽根康治が優勝、神永昭夫が準優勝。
１９５９年	昭和３４年	・第 11 回全日本学生柔道選手権大会において重松正成（３年生）が優勝。
１９６０年	昭和３５年	・全日本柔道選手権大会において神永昭夫が優勝。重松正成（４年生）が３位。 ・第 12 回全日本学生柔道選手権大会は同門対決の末、重松正成（４年生）が２連覇、田中章雄（４年生）が２位。
１９６１年	昭和３６年	・全日本柔道選手権大会において神永昭夫が２連覇。 ・第 10 回全日本学生柔道優勝大会で６回目の優勝。
１９６２年	昭和３７年	・監督 曽根康治。 ・第 11 回全日本学生柔道優勝大会で連覇、７回目の優勝。 ・第 14 回全日本学生柔道選手権大会は同門対決の末、朝田紀明が優勝、坂口征二が２位。
１９６３年	昭和３８年	・千葉県船橋市に姿寮開設。（～昭和 49 年３月閉鎖） ・第 12 回全日本学生柔道優勝大会で２度目の３連覇、８回目の優勝。 ・第 15 回全日本学生柔道選手権大会において重量級で石原賢信が優勝。
１９６４年	昭和３９年	・第 13 回全日本学生柔道優勝大会で史上初の４連覇、９回目の優勝。 ・全日本柔道選手権大会は神永昭夫が同門対決の末、学生の坂口征二（４年生）を倒し３度目の優勝。 ・東京オリンピック開催。（日本武道館） 軽量級で中谷雄英が優勝、無差別級で神永昭夫が準優勝。 ・第 16 回全日本学生柔道選手権大会において無差別級で坂口征二、重量級で上野武則がそれぞれ優勝。
１９６５年	昭和４０年	・全日本柔道選手権大会において坂口征二が優勝。 ・第 14 回全日本学生柔道優勝大会は決勝で負け５連覇ならず。 ・第 17 回全日本学生柔道選手権大会において無差別級で山本裕洋が優勝。
１９６６年	昭和４１年	・全日本柔道選手権大会において坂口征二が準優勝。 ・第 18 回全日本学生柔道選手権大会において無差別級で山本裕洋、重量級で須磨周司がそれぞれ優勝。 ・世界大学柔道選手権大会において篠巻政利が無差別級及び 93kg超級の２階級で優勝。
１９６７年	昭和４２年	・監督 神永昭夫。 ・第 19 回全日本学生柔道選手権大会において重量級で篠巻政利が優勝。

西暦	年号	主な出来事
１９６８年	昭和４３年	・第 17 回全日本学生柔道優勝大会で優勝、10 回目の優勝。 ・第 20 回全日本学生柔道選手権大会において無差別級で篠巻政利、軽重量級で須磨周司がそれぞれ優勝。 ・世界大学柔道選手権大会において須磨周司が無差別級及び重量級の２階級で優勝。
１９６９年	昭和４４年	・全日本柔道選手権大会において村井正芳が３位。 ・第６回世界柔道選手権大会において無差別級で篠巻政利、重量級で須磨周司（学生）がそれぞれ優勝。
１９７０年	昭和４５年	・全日本柔道選手権大会において篠巻政利が同門対決の末に優勝。準優勝は河原月夫(学生)。 ・第 22 回全日本学生柔道選手権大会、選手権の部は同門対決の末に河原月夫が優勝、上村春樹が準優勝。
１９７１年	昭和４６年	・第 20 回全日本学生柔道優勝大会で優勝、11 回目の優勝。 ・第７回世界柔道選手権大会において 63kg級で川口孝夫（学生）、無差別級で篠巻政利２連覇。 ・第 23 回全日本学生柔道選手権大会、中量級の部で原吉実が優勝。
１９７２年	昭和４７年	・全日本柔道選手権大会において岩田久和が準優勝。 ・第 20 回全日本学生柔道優勝大会で２連覇、12 回目の優勝。 ・ミュンヘンオリンピック開催。軽量級で川口孝夫（学生）が優勝。 ・第 24 回全日本学生柔道選手権大会、無差別級で上村春樹が優勝。
１９７３年	昭和４８年	・監督 神田和夫。 ・全日本柔道選手権大会において上村春樹が優勝。
１９７４年	昭和４９年	・全日本柔道選手権大会において重松義成が３位。 ・世界学生柔道選手権大会において無差別級で丸谷武久、中量級で原吉実がそれぞれ優勝。
１９７５年	昭和５０年	・全日本柔道選手権大会において上村春樹が２度目の優勝。 ・第９回世界柔道選手権大会において無差別級で上村春樹が優勝。
１９７６年	昭和５１年	・監督 関勝治。 ・全日本柔道選手権大会において上村春樹が３位。 ・モントリオールオリンピック開催、無差別級で上村春樹が優勝。 ・第 28 回全日本学生柔道選手権大会、中量級で加瀬次郎が優勝。
１９８０年	昭和５５年	・八幡山合宿所（～平成９年）
１９８１年	昭和５６年	・部長 百瀬恵夫　政治経済学部教授。 ・監督 篠巻政利。
１９８３年	昭和５８年	・全日本柔道選手権大会において藤原敬生が３位。 ・第２回全日本学生柔道体重別選手権大会において 86kg級で朝飛大（３年生）が優勝。
１９８４年	昭和５９年	・監督 上村春樹。
１９８６年	昭和６１年	・全日本柔道選手権大会において藤原敬生が準優勝。 ・第 38 回全日本学生柔道選手権大会において小川直也（１年生）が優勝。
１９８７年	昭和６２年	・第６回全日本学生柔道体重別選手権大会において 95kg超級で小川直也（２年生）、95kg級で新垣修（４年生）、71kg級で天本文雄（３年生）」が優勝し明大勢が３階級を制す。 ・第 14 回世界柔道選手権大会において無差別級で小川直也（２年生）が優勝。
１９８８年	昭和６３年	・第７回全日本学生柔道体重別選手権大会において 95kg超級で小川直也（３年生）、95kg級で飛松和雄（３年生）、78kg級で吉田秀彦（１年生）が優勝し２年連続を明大勢が３階級を制す。 ・第 40 回全日本学生柔道選手権大会において小川直也（３年生）が２度目の優勝。 ・世界大学柔道選手権大会において 95kg超級で小川直也（３年生）、78kg級で吉田秀彦（１年生）がそれぞれ優勝。
１９８９年	平成　元年	・全日本柔道選手権大会において小川直也（４年生）が優勝。 ・ 第８回全日本学生柔道体重別選手権大会において 78kg級で吉田秀彦（２年生）が連覇。 ・第 15 回世界柔道選手権大会において小川直也（４年生）が 95kg超級と無差別級の２階級で優勝。

西暦	年号	主な出来事
１９９０年	平成　２年	・監督 原吉実。 ・全日本柔道選手権大会において小川直也が２連覇。 ・第８回全日本学生柔道体重別選手権大会において86kg級で石田輝也（４年生）が優勝、78kg級で吉田秀彦（３年生）が３連覇。 ・世界大学柔道選手権大会において78kg級で吉田秀彦（３年生）が優勝。
１９９１年	平成　３年	・全日本柔道選手権大会において小川直也が３連覇。 ・第40回全日本学生柔道優勝大会で19年ぶり13回目の優勝。 ・第16回世界柔道選手権大会において無差別級で小川直也が３連覇。
１９９２年	平成　４年	・全日本柔道選手権大会において小川直也が同門対決を制し４連覇、準優勝は大滝賢司（４年生）。 ・第41回全日本学生柔道優勝大会で２年連続14回目の優勝。 ・バルセロナオリンピックで100kg超級で小川直也が準優勝、78kg級で吉田秀彦が優勝。 ・第10回全日本学生柔道体重別選手権大会において95kg超級で大滝賢司（４年生）、71kg級で秀島大介（４年生）がそれぞれ優勝。
１９９３年	平成　５年	・監督 重松裕之。 ・全日本柔道選手権大会において小川直也が５連覇。 ・第11回全日本学生柔道体重別選手権大会において78kg級で鉄谷竜三（３年生）が優勝。 ・第17回世界柔道選手権大会において60kg級で園田隆二（２年生）が優勝。
１９９４年	平成　６年	・全日本柔道選手権大会において吉田秀彦が準優勝、小川直也が３位。
１９９５年	平成　７年	・新目黒合宿所完成。 ・全日本柔道選手権大会において小川直也が２年ぶり６度目の優勝。 ・第18回世界柔道選手権大会において71kg級で秀島大介が優勝。
１９９６年	平成　８年	・全日本柔道選手権大会において小川直也が２連覇し、７度目の優勝。
１９９７年	平成　９年	・監督 吉田秀彦。 ・第15回全日本学生柔道体重別選手権大会において100kgで井上智和（４年生）が優勝。 ・第19回世界柔道選手権大会において女子72kg級で阿武教子（３年生）が優勝。
１９９８年	平成１０年	・第47回全日本学生柔道優勝大会で６年ぶり15回目の優勝。
１９９９年	平成１１年	・全日本柔道選手権大会において棟田康幸（１年生）が準優勝、猿渡琢海が３位。 ・第20回世界柔道選手権大会において90kg級で吉田秀彦、女子78kg級で阿武教子がそれぞれ優勝。
２０００年	平成１２年	・第２回全日本学生柔道体重別団体優勝大会において初優勝。 ・第18回全日本学生柔道体重別選手権大会において100kg超級で棟田康幸（２年生）、90kg級矢嵜雄大（２年生）がそれぞれ優勝。 ・世界大学柔道選手権大会において100kg超級で棟田康幸（２年生）、90kg級矢嵜雄大（２年生）がそれぞれ優勝。
２００１年	平成１３年	・第50回全日本学生柔道優勝大会で16回目の優勝。 ・第19回全日本学生柔道体重別選手権大会において100kg級で飯銅崇晋（４年生）、90kg級で泉浩（１年生）、66kg級で寺居高志（２年生）がそれぞれ優勝。 ・第21回世界柔道選手権大会において女子78kg級で阿武教子が３連覇。
２００２年	平成１４年	・監督 秀島大介。 ・全日本柔道選手権大会において棟田康幸（４年生）が準優勝。 ・全日本学生柔道体重別選手権大会において90kg級で泉浩（２年生）、66kg級で寺居高志（３年生）がそれぞれ２連覇達成。
２００３年	平成１５年	・全日本学生柔道体重別選手権大会において73kg級で渡辺一貴（３年生）が優勝。 ・第22回世界柔道選手権大会において100kg超級で棟田康幸が優勝、女子78kg級で阿武教子が４連覇。 ・12月現在の大学十号館に新道場設置。
２００４年	平成１６年	・全日本学生柔道体重別選手権大会において73kg級で海老沼聖（２年生）が優勝。 ・アテネオリンピックで90kg級で泉浩（４年生）が準優勝、女子78kg級で阿武教子が優勝。
２００５年	平成１７年	・部長 飯田和人 政治経済学部教授。 ・全日本学生柔道体重別選手権大会において73kg級で海老沼聖（３年生）が２年連続優勝。 ・第23回世界柔道選手権大会において90kg級で泉浩が優勝。

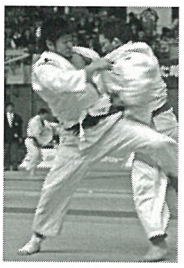
最近１０年間の歩み（２００６年～２０１５年）

2006年（平成18年）

主要大会成績

【学生】
・全日本学生優勝大会　3位
・全日本学生体重別団体　ベスト8
・全日本学生体重別個人
　73kg　海老沼(聖)（4年）2位
　81kg　花本（3年）3位

【一般】
・全日本選手権
　泉　3位
　棟田　出場
・全日本体重別
　66kg　寺居　3位
　81kg　河原　優勝
　90kg　矢嵜　2位
　100kg　山本（2年）3位
　100kg超　棟田　優勝



主な出来事

卒業生（17年度）
澤田　敦士（世田谷学園）
伊藤　博哉（明大中野）
坂本　勇太（旭川大学）
一杉　剛弘（埼玉栄）

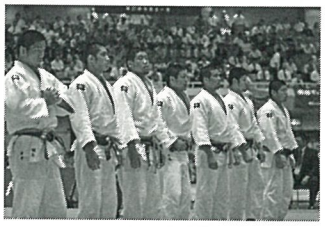
2007年（平成19年）

棟田康幸（OB）が世界選手権・無差別級で優勝

主要大会成績

【学生】
・全日本学生優勝大会　3位
・全日本学生体重別団体　3位
・全日本学生体重別個人
　73kg　西岡（2年）優勝
　81kg　花本（4年）優勝
　100kg　山本（3年）3位

【一般】
・全日本選手権
　泉・棟田・矢嵜　出場
・全日本体重別
　73kg　海老沼(聖)　3位
　90kg　泉　3位
　100kg　山本（3年）3位
・世界選手権（ブラジル）
　無差別　棟田　優勝



主な出来事

監督
藤原　敬生

卒業生（18年度）
海老沼　聖（世田谷学園）
出永　貢嗣（九州学院）
島　　元謙（世田谷学園）
堅野　真樹（崇徳）
田中　　誠（世田谷学園）
鳴海　雄太（明大中野）
濱島　翔太（大宮工業）
日當　浩二（世田谷学園）

2008年（平成20年）

体重別団体で８年ぶり２回目の優勝

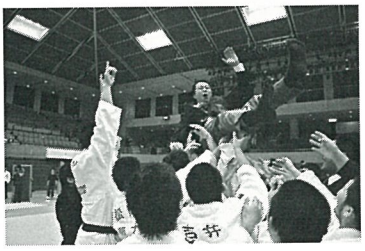
主要大会成績

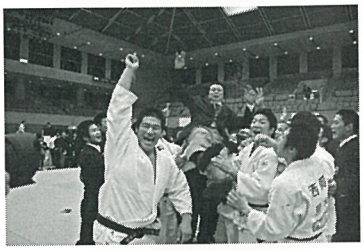
【学生】
・全日本学生優勝大会　2位
・**全日本学生体重別団体　優勝**
・全日本学生体重別個人
　81kg　武田（2年）3位
　90kg　影野（4年）3位
　100kg超　上川（1年）2位

【一般】
・全日本選手権
　棟田　3位
・全日本体重別
　66kg　寺居　2位
　90kg　泉　優勝
　100kg超　棟田　3位
オリンピック（北京五輪）
　泉　出場
世界選手権（フランス）
　棟田　出場
　（無差別級のみ開催）

主な出来事

卒業生（19年度）
花本　隆司（崇徳）
赤木　一隆（延岡学園）
野田　真吾（嘉穂）





鉄の人　藤原監督

前柔道部長　飯田　和人

藤原監督とは、本当によく飲み歩いた。場所は、御茶ノ水、神田、市川あたりが多かったが、飲んでの話はほとんど柔道と柔道部員のことばかり。おかげで、部員一人ひとりの得技や性格、変な癖に至るまで、部長として胸を張れるほどに知ることができた。

両親や兄弟、親戚に柔道経験者をもつ、いわゆる柔道一家の部員もいて、その家族構成まで藤原監督はよく知っていた。驚いたのは、部員の子供時代についても監督が把握しており「彼は小学校の時に引きこもりだったのですよ」と聞かされた時だ。あんなに強そうで厳つい顔をした選手が実は気持ちの優しい子だったという事実も意外だったが、藤原監督が学生一人ひとりを十二分に理解して明治大学への入学を勧めていた、ということに深い感銘を受けたのである。

その監督がいつの日からか酒量がすすまなくなり、やがて酒を飲まずに食事だけ付き合うようになった。しばらく休めば大丈夫だとのことであったが、藤原監督が死に至る病に侵されていることを知るには、そう時間はかからなかったのである。

それでも、監督の柔道と明大柔道部への強い思いは全く変わることがなかった。いや、逆にますます強くなっていったように思われる。一人でも優れた選手を明大にとの熱い思いを胸に、病に負けることなく酸素ボンベを引いて全国を回っていた姿が今でも瞼の裏に鮮明に焼き付いている。

道場には、最後の最後まで出てきてくれていた。監督がこの世を去る数十時間前にも、道場に出て選手たちの指導にあたったのは、藤原監督の鉄のように固く頑強な意思の表れだった。その数日後、監督の訃報に接した時は信じられない思いであった。藤原監督が最後に道場に来た日、その途中で車椅子に乗り自宅に帰るのを見送った折には、まさかこんなに早く別れを迎えようとは思いもしなかったからである。苦しく辛かったはずだ。それをおくびも出さずに、指導に徹する姿を選手諸君にだけではなく、我々残された者どもにも見せて行ってくれたのである。藤原監督は、まさしく鉄の人だった。

また、藤原監督は、久しぶりの優勝の喜びを柔道部と明治大学関係者に与えてくれた。第10回全日本学生柔道体重別団体優勝大会（2008年）での栄冠であり、私にとっては最初で最後の経験であった。あれから明大柔道部に優勝はない。ぜひ強い明治を復活させ、藤原監督の熱い思いに応えてもらいたいと心から願っている。

2009年（平成21年）

主要大会成績

【学生】
・全日本学生優勝大会　ベスト16
・全日本学生体重別団体　ベスト8
・全日本学生体重別個人
　60kg　三枝（2年）3位
　100kg超　上川（2年）　3位

【一般】
・全日本選手権
　棟田　2位
　泉・上川（2年）・山本　出場
・全日本体重別
　90kg　矢嵜　3位
　100kg超　棟田　3位
世界選手権（オランダ）
　100kg超　棟田　出場

主な出来事

卒業生（20年度）
田中　貴大（鳥栖）
林田　洸己（延岡学園）
赤迫　佑介（世田谷学園）
影野　裕和（世田谷学園）
鈴木　雅典（旭川龍谷）
松岡　赳志（埼玉栄）
松岡　禎基（福岡大大濠）
宮田　雄大（崇徳）
山本　宜秀（世田谷学園）

2010年（平成22年）

上川大樹（3年）が世界選手権・無差別級で優勝

主要大会成績

【学生】
・全日本学生優勝大会　3位
・全日本学生体重別団体　3位
・全日本学生体重別個人
　60kg　三枝（3年）3位
　73kg　六郷（1年）2位
　81kg　武田（4年）3位

【一般】
・全日本選手権
　棟田　3位
・全日本体重別
　66kg　海老沼(匡)（3年）優勝
　73kg　西岡　3位
　81kg　河原　3位
　100kg超　上川（3年）2位
・世界選手権（日本）
　66kg　海老沼(匡)（3年）　出場
　無差別　上川（3年）　優勝

主な出来事

卒業生（21年度）
西岡　和志（崇徳）
三好　康督（延岡学園）
佐藤　拓人（東北）
清水　龍太（青森山田）
田村　貴成（世田谷学園）
長谷川賢二（大成）
松岡裕太郎（武蔵越生）

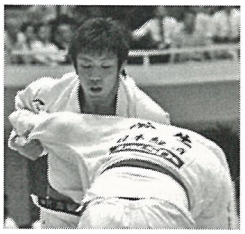
2011年（平成23年）

海老沼匡（4年）が世界選手権66kg級で優勝

主要大会成績

【学生】
・全日本学生優勝大会　3位
・全日本学生体重別団体　3位
・全日本学生体重別個人
　81kg　吉井（4年）2位

【一般】
・全日本選手権
　影野・上川（4年）・
　武田・棟田　出場
・全日本体重別
　60kg　三枝（4年）3位
　66kg　海老沼(匡)（4年）優勝
　73kg　六郷（2年）3位
　100kg超　上川（4年）優勝
・世界選手権（フランス）
　66kg　海老沼(匡)（4年）優勝
　100kg超　上川（4年）出場
・世界選手権（ロシア）
　上川　出場　※無差別級のみ開催



主な出来事

部長
森下　正（政治経済学部教授）
監督代行
園田　隆二

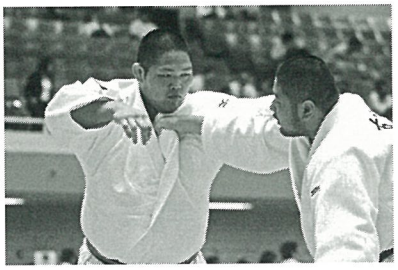
卒業生（22年度）
武田　茂之（大成）
中村　龍太（崇徳）
石沢　翔太（國學院栃木）
加藤　大介（前橋育英）
木下　泰成（那賀）

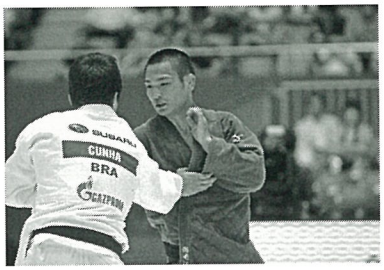
2012年（平成24年）

主要大会成績

【学生】
・全日本学生優勝大会　3位
・全日本学生体重別団体　3位
・全日本学生体重別個人
　100kg超　兒玉（4年）3位
【一般】
・全日本選手権
　上川・木下・棟田　出場
・全日本体重別
　66kg　海老沼（匡）　優勝
　100kg超　上川　2位
オリンピック（ロンドン五輪）
　66kg　海老沼（匡）　3位
　100kg超　上川　出場

ロンドンオリンピック 2選手出場 66kg級海老沼匡 3位





主な出来事

監督
猿渡　琢海

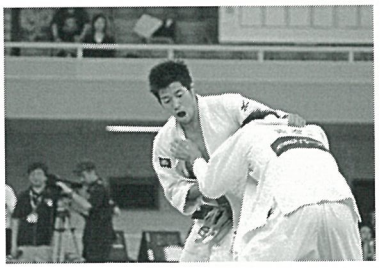
卒業生（23年度）
上川　大樹（崇徳）
岩城　貴士（崇徳）
海老沼　匡（世田谷学園）
加藤　貴也（安房）
木村　一心（青森山田）
三枝　智哉（足立学園）
下山　徳大（大成）
西川　　智（埼玉栄）
原田　　龍（秋田商業）
吉井　　健（大成）

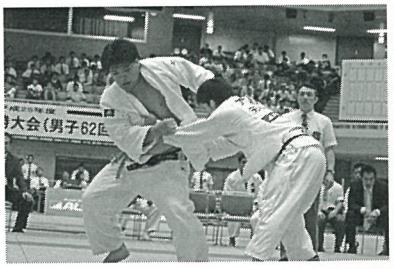
2013年（平成25年）

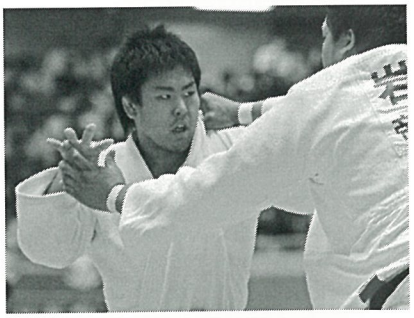
主要大会成績

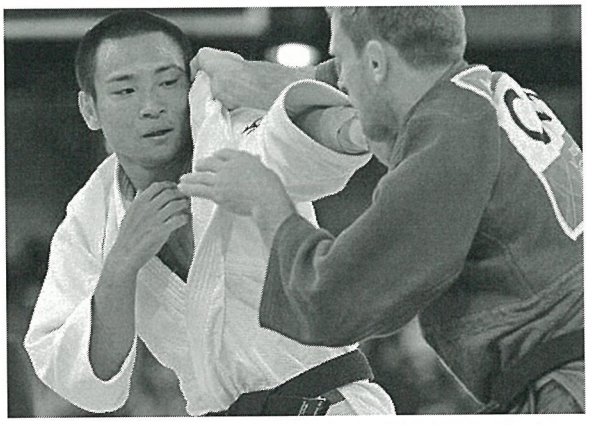
【学生】
・全日本学生優勝大会　ベスト8
・全日本学生体重別団体　3位
・全日本学生体重別個人
　66kg　六郷（4年）優勝
　100kg　高橋（4年）2位
　100kg超　寺崎（4年）優勝
【一般】
・全日本選手権
　影野・棟田・渡辺　出場
・全日本体重別
　66kg　海老沼（匡）　2位
　100kg超　上川　2位
・世界選手権（ブラジル）
　66kg　海老沼（匡）　優勝

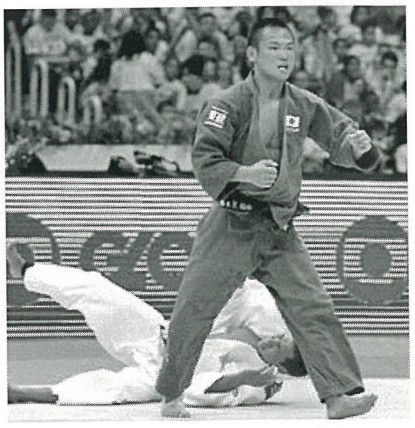
海老沼匡（OB）が世界選手権 66kg級で2連覇





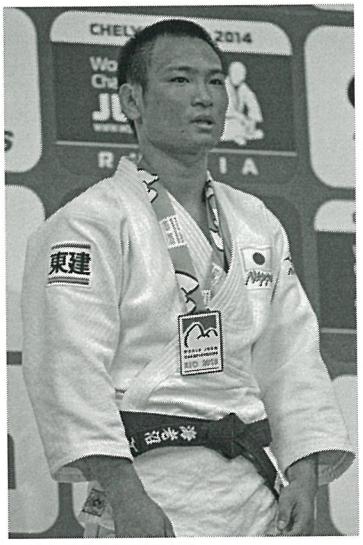






主な出来事

卒業生（24年度）
菅原　健志（大成）
西山光太郎（明大八王子）
市丸　貴彬（甲陵）
岩城　良佑（崇徳）
大竹　祐也（大成）
兒玉　雄一（修徳）
高橋　昂太（田村）
野口　　尚（明大中野）
菱田　昇馬（皇学館）
福田　　渉（世田谷学園）
藤本　英謙（青森山田）
渡辺　智斗（埼玉栄）



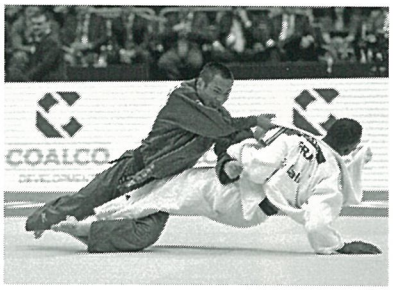
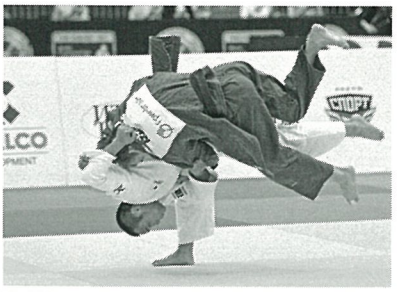
2014年（平成26年）

主要大会成績

【学生】
・全日本学生優勝大会　ベスト8
・全日本学生体重別団体　2回戦
・全日本学生体重別個人
　100kg超　上田（3年）優勝

【一般】
・全日本選手権
　上川　2位
　上田（3年）・木下・高橋　出場
・全日本体重別
　66kg　六郷　2位
　66kg　海老沼(匡)　3位
　90kg　菅原　3位
　100kg超　上川　優勝
・世界選手権（ロシア）
　66kg　海老沼(匡)　優勝
　100kg超　上川　出場

海老沼匡（OB）が世界選手権66kg級で3連覇

主な出来事

卒業生（25年度）
六郷　雄平（大成）
渡邊　　巽（明大中野）
稲木　貴統（大成）
窪田　大樹（金沢）
重松賢太郎（福岡大大濠）
庄司　博一（山形工業）
高橋　良介（大成）
寺崎　達也（崇徳）
羽鳥　雄介（國學院栃木）
宮澤　大希（足立学園）
山下　大輔（皇学館）

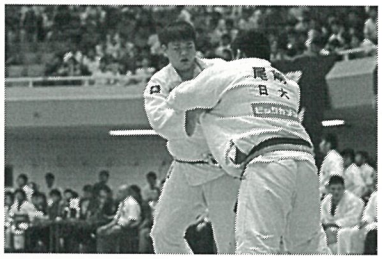
2015年（平成27年）

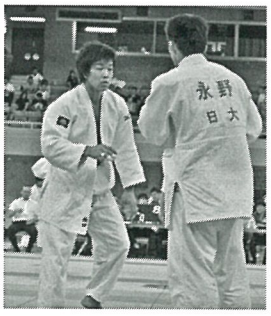
小川雄勢が全日本学生体重別100kg超級で1年生王者!!

主要大会成績

【学生】
・全日本学生優勝大会　ベスト8
・全日本学生体重別団体　3位
・全日本学生体重別個人
　66kg　橋口（3年）3位
　90kg　野々内（2年）2位
　100kg超　小川（1年）優勝

【一般】
・全日本選手権
　上田（4年）・上川・木下・
　高橋・田中（1年）　出場
・全日本体重別
　66kg　海老沼(匡)　優勝
・世界選手権（カザフスタン）
　66kg　海老沼(匡)　出場





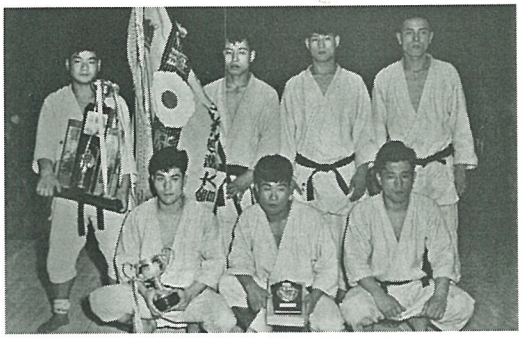
主な出来事

卒業生（26年度）
赤迫　弘幸（延岡学園）
森田　恭生（萩）
倉部愛一朗（札幌山の手）
三枝頌太郎（日川）
玉那覇達也（沖縄尚学）
永田　裕樹（鎮西）
野村　優眞（明大中野）
宮下　稜平（國學院栃木）

歴代の団体優勝写真

全日本学生柔道優勝大会

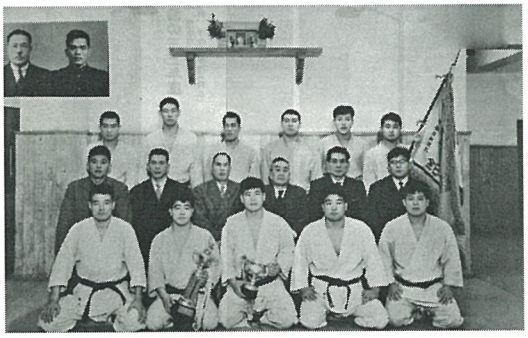
第１回大会（1952 年）



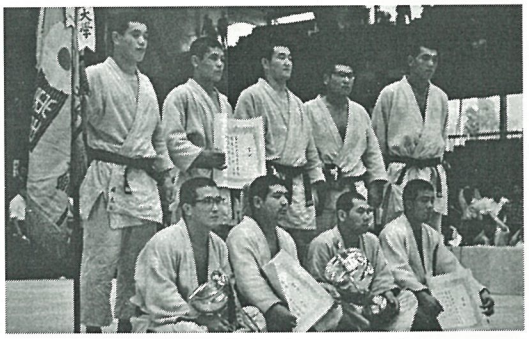
第２回大会（1953 年）

第３回大会（1954 年）

第６回大会（1957 年）



第７回大会（1958 年）



第１０回大会（1961 年）

第１１回大会（1962 年）

第１２回大会（1963 年）

第１３回大会（1964 年）

第１７回大会（1968 年）

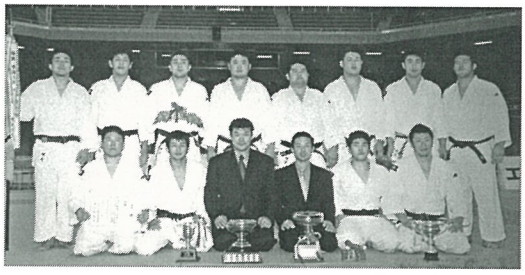
第２０回大会（1971 年）

第２１回大会（1972 年）

第４０回大会（1991 年）

第４１回大会（1992 年）

第４７回大会（1998 年）



第５０回大会（2001 年）

全日本学生柔道体重別団体優勝大会

第２回大会（2000 年）

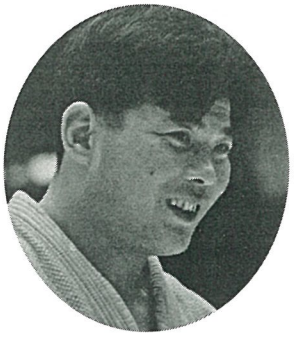
第１０回大会（2008 年）

全日本選抜団体柔道選手権大会

第１回大会（1965 年）

第６回大会（1970 年）

明大柔道の歴代チャンピオンたち
（全日本柔道選手権・オリンピック・世界柔道選手権）



曽根 康治

全日本選手権（1958 年）
世界選手権
（1958 年・無差別級・東京）

神永 昭夫

全日本選手権　3 回
（1960 年、1961 年、1964 年）

中谷 雄英

オリンピック
（1964 年・68kg級・東京）

坂口 征二

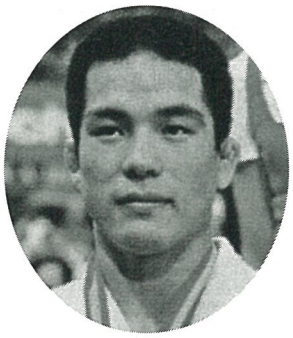
全日本選手権（1965 年）

篠巻 政利

全日本選手権（1970 年）
世界選手権　2 回
（1969 年・無差別級・メキシコ）
（1971 年・無差別級・西ドイツ）

須磨 周司

世界選手権
（1969 年・93kg超級・メキシコ）

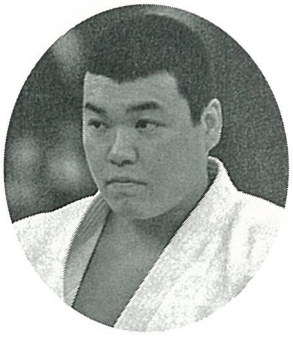


川口 孝夫

オリンピック
（1972 年・63kg級・ミュンヘン）
世界選手権
（1971 年・63kg級・西ドイツ）

上村 春樹

全日本選手権　2 回
（1973 年、1975 年）
オリンピック
（1976 年・無差別級・モントリオール）
世界選手権
（1975 年・無差別級・オーストリア）



小川 直也

全日本選手権　7 回
（1989 年～ 1993 年、1995 年、1996 年）
世界選手権　4 回
（1987 年・無差別級・西ドイツ）
（1989 年・95kg超級・ユーゴスラビア）
（1989 年・無差別級・　〃　）
（1991 年・無差別級・スペイン）

吉田 秀彦

オリンピック
（1991 年・78kg級・バルセロナ）
世界選手権
（1999 年・90kg級・イギリス）

園田 隆二

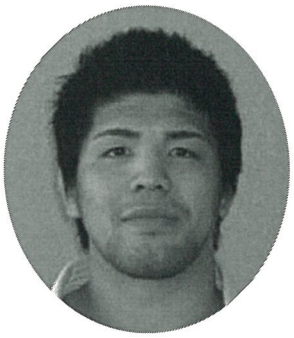
世界選手権
（1991 年・60kg級・カナダ）

秀島 大介

世界選手権
（1995 年・71kg級・千葉）

棟田 康幸

世界選手権　２回
（2003 年・100kg超級・大阪）
（2007 年・無差別級・ブラジル）

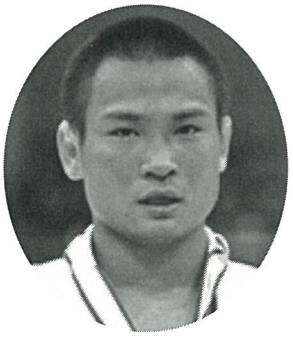


泉 浩

世界選手権
（2005 年・90kg級・エジプト）

上川 大樹

世界選手権
（2010 年・無差別級・東京）



海老沼 匡

世界選手権　３回
（2011 年・66kg級・フランス）
（2013 年・66kg級・ブラジル）
（2014 年・66kg級・ロシア）

阿武 教子

全日本女子選手権　５回
（1993 年～ 1996 年、1999 年）
オリンピック
（2004 年・78kg級・アテネ）
世界女子柔道選手権　４回
（1997 年・72kg級・フランス）
（1999 年・78kg級・イギリス）
（2001 年・78kg級・ドイツ）
（2003 年・78kg級・大阪）

【3 大大会優勝者数】

○ 全日本柔道選手権【7名】
男子６名　15 回
女子１名　５回
○ オリンピック【5名】
男子４名　４回
女子１名　１回
○ 世界柔道選手権【14名】
男子 13 名 20 回
女子　１名　４回

頑張れ明柔魂！！

思い出の人びと

元日刊スポーツ記者　**宮澤　正幸**

私が新聞記者のスタート台に立ったのは1953（昭和28）年のことで、記者はキシャでもトロッコの時代だ。この年、第２回全日本学生柔道優勝大会で、明大Ｖ２を拝見している。上位は２年連続で明日中早４校と定まっていた。だが、第３回大会の直前、私は天理短大の初上京を取材する。世に有名な武道専門学校（京都、敗戦で解体）の生まれ変わりということに強い関心を持ったせいだ。上位は明日早と天短に変わった。それから１年おいて①天理大（４年制に昇格）②早③中③同大と私の予想通り新展開が始まる。その次の年は明大が３年ぶり４度目の優勝②早③拓③慶と往年の古豪が復活―そういう時代だった。1959（昭和34）年２月、私は目黒の合宿所を訪ね、重松正成、山尾英三、石橋毅次郎、岩崎勇、佐藤治の各氏を連載用に取材した。その前後には日大高橋彰－明大黒住大和の試合（講道館）を取材した。弾みで高橋の背中に黒住がオンブされたまま両者困惑の珍風景が思い浮かぶ。

レスリングと柔道

大東亜戦争に日本は敗れ、占領軍のＧＨＱ（連合軍総司令官マッカーサー元師）から「日本の国家神道と学校教育を切り離す」指令が出て、武道（女子のナギナタまで）は禁止となり、学生柔道は６年間、剣道は７年間休止を余儀なくされた。ただし、警察・鉄道公安官・刑務官は別。ここで明大柔道部の先輩方を偉いと思うのは、「第二レスリング部」の看板を作って、こっそり柔道の稽古を再開したことだ。もちろん他校に魁て―これが学生柔道復活の際、役立った。伊藤信夫、金子泰興、その下に曽根康治さんがいた。ノブさんと曽根さんは本当にレスリングの試合に出た。日本のレスリングは敗戦後、旧柔道部員が集まって早くに復活した。しかし、ヘビー級は人材不足だった。そこで柔道から人を借りた。曽根さんはトルコ遠征に加わった。相手はレスリング王国だ。裸で、掴む所がない。組んだとたん見事に投げられた。神田和夫、門屋賢悟さんの名は学生レスリング・リーグ戦のエントリーで見つけた。岩手県宮古市の門屋兄弟は全員が柔道だが、正三（拓大）と賢悟はレスリングで活躍した。弟さんは寝技が強いと評判。今も北海道で接骨院を経営、健在の由。

空手協会重鎮の今松夫さん

筆者（昭和５年２月生まれ）より２～３年下に渡辺欣嗣、渡辺政雄とか今松夫さんがいる。異色は今さんで、社団法人日本空手協会の相談役として重鎮だ。1987年世界選手権大会（エッセン）の時、デュッセルドルフ国際空港に降りると、上村春樹役員が「空手の人、迎えに来ますよ」と筆者に声をかけた。その意味はすぐにわかった。地元に越智秀男（拓大）十三恵（津田塾大空手部主将）夫妻がいる。そして今さんが夫妻を春樹さんに紹介したということ。越智師範の車でホテルに着いた。数日後、男子は練習後、バスで越智道場に招かれてすき焼きをご馳走になった。この大会で19歳の小川直也（明大２年）が最年少優勝。これも今先輩支援のおかげと思う。

ピストル取りの妙技・河辺さん

河辺一彦さんも忘れられない一人だ。昭和35～36年ころの全日本選手権大会に確か講道館護身術で出演した。「手を上げろ」と胸元にピストルを突き付けられる―そこからだ、いつもと流れが少し変わった？取の河辺さんが相手のピストルを取り上げ、受の背中にピタリ。報道席の筆者もウームと唸ったが、その瞬間、館内上階から少年の声で「サースガ」と感嘆の声が響き渡った。一斉に笑い声と拍手―あの人には、もう会えないのか。

神永・小林・村井さん

神永昭夫さんについては今年８月にベースボール・マガジン社から刊行された〈スポーツ「戦後７０年史」⑦〉の中に、たっぷり書かせていただいた。書きながら涙を流す私である。並みの記者とは少し異なる関係もあった。神永家の隣が叔父の家だった。仙山線（昔は蒸気機関車が走っていた）を挟んで東照宮の山の右に伯父の家があった。ということもあって弟の正夫さんとは“兄弟”のような気持ちで交流が続いた。しかし、その正夫さんも今年の２月ころ福岡市で物故とは世もはかない。

全日本実業柔道連盟の刊行物や、昭夫さんの“軌跡”をつづる本を作るときは、新日鐵の村井正芳さんの迫力に押された。あの、穏やかな人物から時に鬼気迫るものを感じた。いろいろ迷惑をお掛けした。一方で小林敏邦さんは昭夫さんの同期と伺ったが、物腰の柔軟な、かつ器用な人でもあった。新幹線の中で、ご両所に飲まされ、下車した東京駅の地下街でも続き、完全ダウンした筆者をタクシーで世田谷の在の家まで送り、２階玄関までおぶってくれたのだから一生、村井さんには頭が上がらない。ある時、大阪のダイコロ武友館で実業団の大会があり、京都駅へ向かう途中の駅で、昭夫さんと小生らで一杯やった。「偶然、東北が３人揃ったね」と小生。村井さんは秋田の出身だ。「おや、宮澤さんは小田原（神奈川県）でしょう？」と村井氏。すかさず「隣だよ」と昭夫さん。それで関係がバレた。

サンマは気仙沼に限る

仙台の話が出ると佐藤幸二さん。昭和42年の全日本３位。大型ではないが正々堂々の試合ぶりは好感度ＮＯ．１。しかも前年優勝の松永満雄を破って①岡野功②佐藤宣践に次ぐ成績だった。そして温厚篤実な人柄。のちに、みやぎ国体（気仙沼市）でお世話になった。ついでながら、この国体ではサンマの塩焼き大サービスが人気だった。九州から来た山本裕洋審判員。同じ審判仲間から「サンマの匂いが服にしみついてますよ。何尾食べたのですか？」と問われて「昼の弁当の時だから、せいぜい５尾」と笑わせていた。

“瞬間湯沸かし器”とチョコレート

審判員の話のついでだから思い出を一つ。学生柔道大会（日本武道館）の時、明大選手と審判員とが試合中のことで、場外乱闘になりかけた。口論が始まった時点で筆者は上村春樹さん（監督だったか？）を探しに行った。こういう時の春樹さんは頼もしい。マアマアと割って入り、話を聴いてなだめ役。どうも学生の方は“瞬間湯沸かし器”と呼ばれる激情型だったらしい。その相手の審判員も出身大学の方から「同タイプです」と打ち明けられた。事故を未然に防いだことになりますかね。
同じ上村春樹さん。１年生らしい部員に「どうだ、もう校歌、覚えたか？」「はい、覚えました」「歌ってみろ」「はい、♪チョコレートは明治」「このやろう」―そばで筆者は感動した。この指導者にして、この弟子あり。いい関係ですな。かくあるべきかも入れない。他山の石として忘れない。

いちばん見事だったヤジ

東京体育館（千駄ヶ谷）で昭和40年の学生優勝大会決勝。前年のオリンピック東京大会重量級銀メダルのロジャース（カナダ）を新入生に加えた拓大と明大の顔合わせ。ロジャースの１点を守った拓大の初優勝となるのだが、２階席から「高橋、５年生！！」とヤジが大声で飛んだ。いいタイミング、すこぶる付きの鋭いヤジ。小生、感心した。学連ルールで４年間は出場できるのだから５年生でも支障ないのだが、ヤジの声の主は前出の小林敏邦先輩か？ヤジ大賞があればと惜しまれる。ちなみに高橋久男は前年の拓大主将、のち神奈川県警副主席師範。長男は横浜高―拓大―トヨタ自動車―広島カープ―米大リーガー―広島（引退）投手。

早大が明大校歌で祝福

1992（平成4）年の全日本選手権大会で24歳になった小川直也（日本中央競馬会）が山下氏以来の４連覇を果たした。２位は大漉賢司（明大４年）だった。筆者は日刊スポーツに「早大が明大校歌演奏」という記事を書いた。神永専務理事からの発案で初の試みとして採用された生バンド。早大応援部の吹奏楽団が、選手入場などの時に生演奏したが、明大勢同士の決勝が終わった後に即興で〝白雲なびく駿河台―を演奏したもの。次大会以降この感動的な情景は聴くことも見ることもなかった、と思う。早明の古豪だから出来た友情出演だ。

（拓殖大学客員教授・百年史編集室専門員）

明治大学柔道部創立１１０周年に寄せて

スポーツライター　**木村　秀和**

○明治魂を持ったスターの育成を

明治大柔道部が創部110周年の年輪を刻んだと言う。

10年前、「明柔・明大柔道部100年の軌跡」刊行の時も拙文を寄稿したことがある。その時は、明大柔道部は本番に強く魂の柔道をやる集団だ。相手が自分より大きいとか実績があるとかは関係ない。畳に上がったら心意気を前面に出して戦うのが明治の魂の柔道だと書いた。

ただ、それは以前の旧道場、古いビルの５階にあった曲尺のような部屋を二つ組み合わせたような道場で汗を流した選手に言えることで、現在の新道場に移ったら果たして明治の魂の柔道が今の選手に受け継がれるのだろうか？　と言う不安もその時提起しておいた。そんな心配が杞憂になることを願っているとも書いた。

だが、今振り返るとその不安はほぼ的中してしまったようだ。実際、学生柔道の華、団体優勝大会に明大柔道部は2001年を最後に一度も優勝はしていない。この間は国士館大と東海大の天下で、今年は筑波大がその枠組みを打ち破った。魂で戦う明大は上位安定だがトップにはなれなかった。

旧道場の腰板には喜びや悔しさで流した涙や激しい稽古のこすれた跡がしみこんでいた。そこから明大柔道部の誇りを持った選手は巣立って行った。

明大柔道部は東京大会などでは良く負けた。だが、本番になると優勝した。そこにはここぞと言う時は集中して心意気で戦う伝統があった。

加えて、当時の明大柔道場には実業団や海外の選手がよく練習にやってきた。交通の便が良く、道場には練習台にふさわしい選手がごろごろしていたから力を付けたいと思う選手は古い道場へ足を運んだのだ。明大の選手もそうした環境で粘り腰を鍛え、技術も向上させていった。

そうした背景があったからこそ、明治は予選で不振でも本戦では優勝できる力を裏打ちしたわけだ。明大柔道部の選手は日頃から肝心な時には活躍出来る心気力を道場で養っていたのだ。

例えば、東京大会は３位で本番優勝は57、61、68、98、01年などがある。東京大会４強以下で本番は優勝という のは63、91年などがある。

こうした実績は魂の柔道の後押しもあるが、もう一つ共通しているのがチームを引っ張る絶対エースの存在だった。簡単に言えばスター選手の存在だ。例えば63年は村井正芳、坂口征二。68年は篠巻政利、須磨周治。91年は吉田秀彦、松本昌広。01年は矢嵜雄大、棟田康幸といった選手たちだ。

では、そうした選手は最近の明治にはいなかったのか？　否、高校時代や中学時代に活躍し、スターになれる素質を持った選手はたくさんいた。だが、大学入学後はそのきらめきが消えぱっとしなかった選手も多い。

重量級で世界的な選手に成長したのは近年では上川大樹ぐらいだ。やはり、チームの核になる選手がいるのといないのとではチームの安定感、安心感が違ってくる。その意味では今後、明大柔道部復活の鍵は案外核になれるスターを育てることと言っても良いかもしれない。

その視点で今の明大柔道部を見ると、非常に素質に恵まれている選手がたくさんいる。小川雄勢、田中源大、三村暁之、川田修平らは高校時代から活躍した選手でスター性も持っている。彼らを巧く育てれば再び、明治の時代が戻ってくる可能性はある。４年には上田轄麻がいる。

明大は藤原敬生監督の急逝などで指導体制が揺らいだ時があった。そうしたアクシデントも優勝から遠ざかってきた一つの要因かも知れない。

だから、これからは猿渡琢海監督を中心に明大柔道の矜持を取り戻しスター選手を育てていけばそれこそ明治魂の反攻の時になるだろう。

魂の柔道の心意気をしっかり持ったチームの核になるようなスター選手が育った時、明治柔道は復活する。

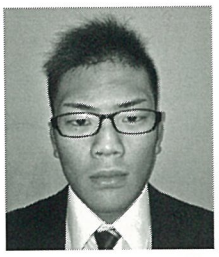
部員紹介　そして未来へ～

猿渡監督

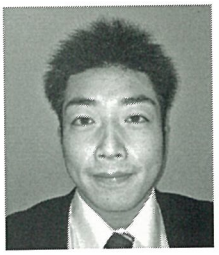
河原助監督

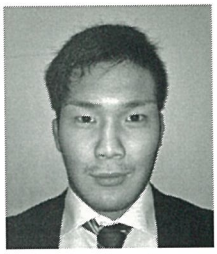
4年生

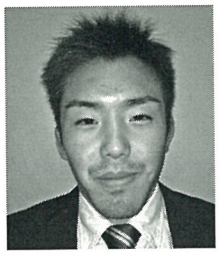
主将　上田　轄麻
（大成）

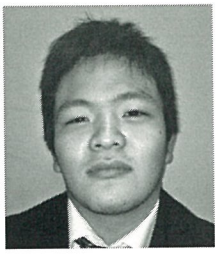

副主将　佐藤　允啓
（國学院栃木）

主務　井上　涼太
（明大中野）

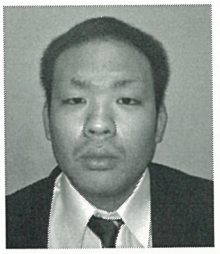

青柳　勇輝
（札幌第一）


奥村　和也
（大成）

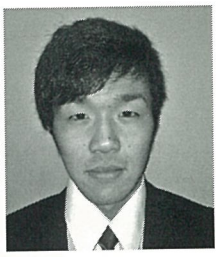

小野　大樹
（大成）

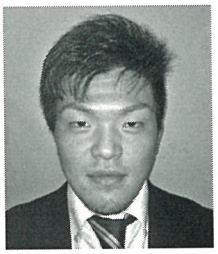

鈴木　辰巳
（北海）

立山　宗一郎
（鎮西）

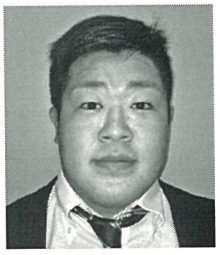

筒井　恵弥
（崇徳）

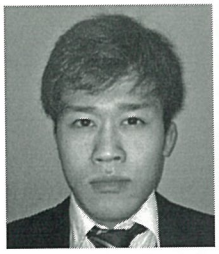
3年生

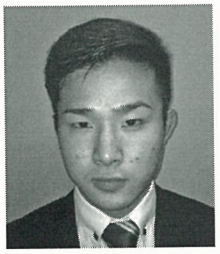

副主将　橋口　祐葵
（延岡学園）


副主務　新島　毅之
（延岡学園）

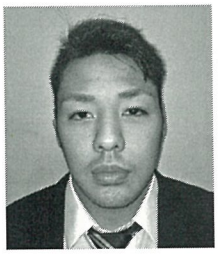
秋元　浩樹
（足立学園）


五十嵐　永一朗
（羽黒）

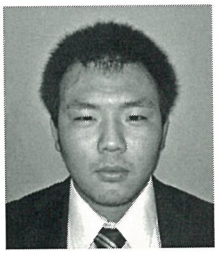

岩越　健斗
（大成）


梅井　大地
（京都学園）

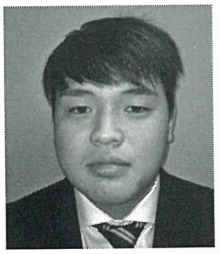
鎌田　嵩平
（東海大浦安）

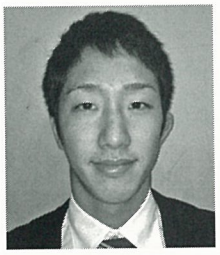

安田　圭吾
（大成）

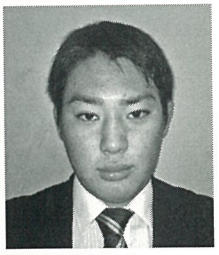
2年生


金山　天地
（柳ヶ浦）

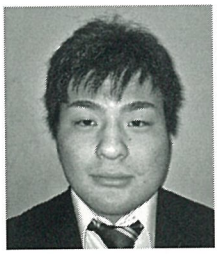
児玉　貢輔
（延岡学園）


名垣浦　佑太郎
（大成）

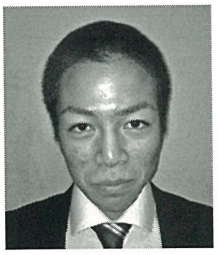

西川　風万
（報徳）


野々内　悠真
（崇徳）

水野　隆介
（大成）


三村　暁之
（崇徳）

1年生


稲毛　傑
（習志野）

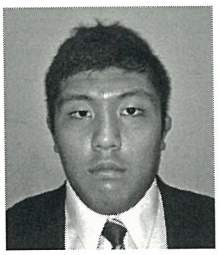
小川　雄勢
（修徳）

加倉　雅士
（高川学園）

川田　修平
（大成）

近藤　優貴
（国東）

田中　源大
（高川学園）


原澤　脩司
（修徳）

増本　大輝
（崇徳）

MEIJI UNV. JUDO CLUB
A LIST OF MEMBERS

想えば――

月日の経つのは早いもの、である。

明柔会の広報活動は昭和５（1930）年に始まった。「柔道部の支援と会員相互の親睦を図る」をモットーに、この年会報第１号が発刊され、大戦勃発まで不定期ながら10年間続いたと記録されている。時を経て昭和60(1985)年に会報『明柔』が復活した。幹事会の席で同期だった神永昭夫が会報の復刊を提案し、「広告集めは俺が責任を持つ、本作りは小林がやる（本人は寝耳に水だったが……）」と宣言した。夏休み明けに第１号が出来上がった。その後、平成６（1994）年まで定期出版が続いた。しかし、その前年の平成５年の神永の急逝により事態に変化が生じた。広告収入が落ちはじめて資金不足となり、定期出版が出来なくなった。神永の社会的信用に甘えていたツケが回ってきた。その後も出版は不定期のままであったが、今般、Ｓ幹事長指揮の下で、Ｔ君・Ｓ君が編集に取り組んだ。真に頼もしい限りだ。

以上、会報『明柔』の流れを簡単に述べたが、編集部には柔道部の歴史を整理する責務もあり、その部分を意識して当初から編集にあたったものである。

会報が復活した当時の1980年代は往時を知る先輩方が多く健在で、直接お目にかかり、また文章で御意見、御記憶を直接聴ける時代だった。私は後日の『100年史』作りが頭にあったので「この時期を逃すな」とばかり、失礼を承知であちらこちらに足を運び、踏み込んだお話をうかがった。事実、2005年の創部百年の集いに、残念ながら戦前を知る先輩のお姿はなかった。

さて、柔道部は本年創部 110 年を迎えたが、ＯＢ会組織である「明柔会」の歴史にも触れておきたい。「明柔会」は昭和４（1929）年に発足している。大正 12（1937）年の関東大震災で柔道部は道場を失った。以後７年間は出稽古専門の部だったが、昭和５年の大学記念館再建に伴ってその地下に道場が新設された。昭和５年は大学の創立 50 周年にあたり、その記念行事の一つとして行なわれた新道場落成記念演武大会は、世間の注目を浴びたという。以来、この地下道場は 25 年後の昭和 31（1956）年、小川町校舎に新設された道場に移るまで多くの人材を生み、明大魂を修練する場として斯界に喧伝されることになる。

新道場の設置に尽力してきたＯＢたちも、この際、部の支援体制を固めるべく、それまで暫定的な活動にとどまっていたＯＢ会の組織改革に乗り出し、昭和４年、「明治大学柔道部の賛助と会員相互の親睦を図る」事を目的に全国ＯＢ組織「明柔会」を結成した。「明柔会」の発足は学生と先輩の間を一層緊密なものとし、両者は正に一心同体の関係となって今日に至っている。この一体感が現在の明大柔道部の繁栄を支え、また構築していると言っても過言ではない。

（前編集長Ｋこと小林敏邦）

編集後記

鹿児島から上京した私が卒業したのは 1985（昭和 60）年度。まだ、現在のラウンジがある紫紺館に道場があった。あれからちょうど 30 年。今年、柔道部が創部 110 年を迎え、記念誌作成のお手伝いをさせて頂いた。

４年間の思い出は数限りない。厳しかった稽古、悔しかった試合、下級生の頃は辛かったが、上級生になると楽しかった寮生活。喜怒哀楽をともにした同期生や先輩、後輩の顔とともに、様々なシーンが浮かんでくる。

卒業とともに道着を脱いだ私は新聞社に入ったが、それでも「明柔」のつながりは強固だった。取材先、立ち回り先にはともに汗を流した仲間がおり、他大学の卒業生とも想像が出来ないくらい親しくさせて頂いた。

スポーツに縁遠い人たちまでが「明大柔道部卒」と言うと、一目置いてくれる。それは多士済々な先輩方が各分野で築いてくれた信頼と実績の証し、恩恵だと思う。今は 110 年の伝統を誇りに思いながら、先を担う後輩たちが作る新しい歴史を楽しみにしている。（T.T）

北の大地から「とんでもないところへ来てしまった」と思ってから早四半世紀。鬼のＨ監督とＳ助監督が目を光らせる中、厳しい稽古に一日7kg も体重が減った日もあった（意識しないダイエットが懐かしい）。まさか漫画タイガーマスクで見た虎の穴が本当に存在するとは知らなかった。しかし、結果も最高だった。

優勝旗を 19 年ぶりに駿河台道場に持ち帰った。翌年も連覇した。姿先生や多くのOBとともに声高らかに校歌･部歌･優勝の歌を歌った。嬉しかった。誇らしかった。あの４年間と優勝の瞬間は大切な思い出に留まらない、その後の人生のバックボーンとなっている。

「目的を持って自分の意思で練習に取組むこと」等、多くの先輩方からアドバイスを貰った。何れも柔道修行に留まらない人生訓となった。明大柔道部の一員となったことは大きなチャンスであるが、チャンスを掴むか逃すかは本人次第。110 周年記念誌ではあえて最近 10 年を中心に編集した。戦績的には山も谷もある。これから10年はどうだろう。

後輩達にも日本武道館で校歌・部歌・優勝の歌の 3 歌を歌って欲しい。私も隅のほうで少しだけ細くなった体で大きな声で歌いたい。歴史ある機関誌“明柔”の編集に携わって伝統を振り返る機会に恵まれ、改めて強くそう思った。（S.S）

写真提供：近代柔道、明大スポーツ新聞部

MEIJI UNV. JUDO CLUB
A LIST OF MEMBERS